哲學研究　第四十四號　第四卷第十一冊

認識主觀の問題

田邊元

一

カント認識論の獨得の意義が認識の主觀として超個人我を確立した點に存するとは今改めて說くまでもない。個人的自我が經驗の對象として外界の物體と同じく現象の世界に屬し、バークレイの考へる如く前者のみ實在にして後者は唯其有する觀念に過ぎざる如きものでないことを明にすると同時に、此等の經驗的對象を可能ならしむる條件として範疇の綜合に豫想せられる所の超個人我、卽ち所謂意識一般なるものを說いたのが彼の客觀的觀念論の特色である。之に由つてバークレイの主觀的觀念論が否定した外界物體の經驗的實在性を確保し、而して其所謂實在性或は一般に認識の眞理性を觀念の超越的なる物自體に對する一致に求めずして、綜

合の客觀性卽ち必然性普遍妥當性に求めた所にかの所謂コペルニクス的轉回が成立つのである。意識一般或は超個人的主觀の說はカント認識論の樞軸を成すものといつてよい。然らば其所謂意識一般とは果して如何なるものであらうか。此超個人我は個人的自我に對し如何なる關係に於て立つのであらうか。カントに從へば我々が對象に於て結合せられたものとして表象する所の das Mannigfaltige は、豫め主觀が之を結合したものでなければならぬ。縱それが意識せられると否とに拘らず、斯かる主觀の結合があつて始めて客觀的對象に於ける結合が可能となるのである。此主觀の結合作用をなすのが悟性に外ならない。範疇は悟性が斯かる結合を行ふ場合に一般的規準となる形式を表はす概念である。然るに悟性の結合には結合せらるべき直觀の多樣が綜合的に統一をなして與へられることを必要とする。然らざれば結合は一般に不可能である。斯かる統一があつて始めて悟性の結合も可能となる。其故此綜合的統一は悟性の凡ての範疇的結合の根本條件となるものであつて、從つて又此は凡ての客觀的對象成立の根本豫想となる譯である。此所謂綜合的統一は卽ち自覺の先驗的統一に外ならない。凡そ我表象には必ず「我思ふ」といふ自覺が伴ふことが出來なければならぬ。然るに此同一なる自覺は凡ての表象

が我に意識せられる限り意識に綜合統一せられることに由つて成立つのである。而して此綜合的統一を豫想することに由つて悟性も其結合を行ふことが出來、經驗も之に由つて成立するのである。此が自覺の先驗的統一であつて、或は之を先驗的統覺といひ、純粹統覺と呼び、又原始的統覺とも稱する。而して此自覺に於て成立する所の自我は凡ての概念的規定の豫想となるものであつて、其自身に於ては未だ何等の規定を有せず、如何なる表象にも形式上同一なるものとして隨伴するに由り、其は所謂意識一般である。個人的自我も他の經驗的對象と同じく此先驗的なる自我、意識一般を豫想して始めて可能となるのであるから、此は全然超個人的なるものでなければならぬ。併しながら斯かる自我は決して實體として存在するものではない。實體の範疇も此自我の統一を豫想して始めて其結合を成すことが出來るのであつて、其結合には質料として直觀の多樣を必要とする。單に「我思ふ」といふ判斷の主語として思惟せられる我は斯かる內容を有せざる純形式的の概念であつて、自ら認識の對象となることは出來ない。若し內官の規定として生ずる直觀の多樣を對象に結合するならば自我も一つの對象として成立することになるけれども、併し斯かる自我は已に經驗的の自我であつて、先驗的の純粹我ではない。其は單に個人的

であつて超個人的ではないから、斯かるものを以て認識の客觀性を基礎附けすることは勿論出來ない。而して此樣な經驗的の個人我も其が對象として成立するには自覺の先驗的統一に於ける超個人我を豫想しなければならぬこと明である。此は實に凡ての經驗的對象を可能ならしむる認識の sine qua non であつて、其自身は認識せられず唯思惟せられるものなのである。

先驗的自我は右の如く何等の實在性なき意識の形式であつて、認識の根本條件として論理的の豫想たる意味を有するに過ぎない。カントが『純粹理性批判』の第一版に於ては悟性概念の Deduktion に先驗心理學の立場を採り、精神の活動として Apprehension, Reproduktion, Rekognition を說き、概念に於ける再認作用の基礎として純粹統覺の綜合の必要なることを認め、之を『作用の同一』の意識(Kant, Kritik der reinen Vernunft. I. Aufl. s. 108)といふ事實に基くと解したのを第二版に於て改め、前述の如く先づ一般に結合といふ概念から出發して、專ら其論理的豫想として自覺の先驗的統一の必要を說き、以て其先驗論理的立脚地を純粹ならしめんと試みたのは、先驗的自我に內官の與件としての心理的實質を與へて實在的對象と誤認せしめ、延いて其說をバークレイの主觀的觀念論と混同せしむるに至ることを防止しやうと欲した爲めであら

う。ガントに於ては先驗的自我は何等の內容無き認識の形式的條件たるに止まる。今日カントの先驗的觀念論を最も純粹明白に代表すると認められるリッケルトの說も、更に之を徹底せるものに外ならない。已にカントの立場に於ても意識一般たる先驗的自我は正當には單に認識成立の普遍的豫想としての形式的概念といふ論理的意味を有するに止まるものなること今述べた如くであるが、併しカントは猶之を意識の直接事實に含蓄せらるゝものとして說くことを免れなかつた。元來カント認識論の主目的の一つは、彼が絕對の眞理であると確信したニウトンの物理學に確固たる根據を與へるにあつたことは疑無い。之に因つて彼が自覺の先驗的統一を說いた範疇のDeduktionに於ても、其態度は、彼にとつて唯一の眞正なる經驗的認識たる自然科學に對し、其先驗的基礎として現に斯かるものがあるといふ事實を明示するといふやうな傾向を免れない。先驗的自我も否定すべからざる自然認識の根據として事實上存立するものであるといふ意味を脫して居らぬ。然るに此立場は、一層廣く自然科學が唯一の經驗的認識でなく、其が或立場からの經驗的認識に止まることを認めるに至れば、漸く移動して、自然科學が一種の經驗的認識として成立するには某々の先驗的基礎が無ければならぬといふ有極的の見方に變ずるのは自然の

理である。而して本來事實問題でなく權利問題を論ずることを其職分とする批判主義にとつては、此有極的なる見方が其正當なる立場たることは否定出來ない。其結果一般に認識の根本豫想となる意識一般も有極的の立場から見られて其形式的條件たる意味を發揮する。カントの批判主義を純化發展することを以て任とせるヴィンデルバントが、其有極的觀念論の立場から下した解釋は正に之に相當する。氏は自然科學以外に別種の經驗的認識が可能なることを認め、其等が各々如何なるアプリオリを豫想するかを明にすることを知識哲學の主要なる任務とし、而して一般に認識の眞理性を以て『思惟規範性』にありと解した(Windelband, Präludien I.S. 138)。其故認識の主觀たる意識一般は夫々の認識が成立する爲めに實現せられなければならぬ規範的意識となる。現實の個人意識に於て認識が成立する爲めに其が實現せなければならぬ規範的意識、此が卽ち意識一般である。此は個人意識と獨立に實在する對象でないことは勿論、如何なる意味に於ても個人意識の外に事實として成立するものではない。カントに於ては意識一般は對象ではないけれども尙何等かの意味に於て事實たる如き傾向を脫せず、充分其規範性が明でなかつた爲めに、之と現實の個人意識との關係も充分明瞭でない所があるとも思はれるのであるが、今や意

識一般は事實でなく規範となり現實なる個人意識に對しては其追求の目的たる理想であるといふことが明になつた。リッケルトは卽ち此思想を開展して認識の主觀に詳細の說明を下したのである。

氏に從へば主觀客觀の對立には次の三種が考へられる。第一は外界の凡ての對象を客觀とし、之に對し余の身體と之に宿る精神とを主觀とするものであつて、所謂精神物理的主觀これである。然るに余の身體は余の意識內容に對立する對象であるといふ點に於て他の對象と全く區別が無いから此は客觀に屬すと考へられるものであつて、斯くして余の意識內容に對立する超越的對象を凡て客觀とするに對し、余の意識と其內容とを主觀と考へることが出來る。此が第二の心理的主觀と名づくべきものである。然るに意識內容に對立する超越的客觀なるものは、批判主義の立場から摸寫說を棄てると同時に當然意味無きものとなるから、第三には凡ての意識內容を客觀とし、之に對し意識其ものを主觀とする立場が生ずる。此が眞の認識論的立脚地から採るべき主觀客觀の對立であつて、此意味に於ける主觀が眞に認識主觀と稱すべきものである。卽ち凡ての意識內容を客觀に屬せしめて、如何にするも客觀とならざるものが認識の主觀である。斯かる主觀は何等の內容的規定を有

せざるものであるから自己の意識といふ規定を有せず、意識一般と稱すべきものであつて、一の限界概念に外ならない。而も認識の內容は斯かる主觀に對し認識せられたものとして始めて客觀となるのであるから、此の主觀を除去することは出來ぬ。此樣な形式的の限界概念としての意識一般が認識成立の根本豫想である。併しながら斯かる認識主觀に對する客觀は凡て意識內容である以上、其超越性は現實意識に對する意味の超越より外にはあり得ない。此意味の承認定立が判斷である。認識を表象と解する限り其對象は超越的實在となることを免れないのであつて、其立場は摸寫說を脫することが出來ぬ。若し摸寫說を脫しやうとするならば、我々は認識を表象と解する考を棄てゝ之を判斷と解しなくてはならぬ。判斷に於て承認定立せられたる意味が卽ち認識の對象性を成すのである。客觀は斯かる意味を有するものとしての意識內容であつて、主觀は之を承認定立する判斷意識でなければならぬ。而も此判斷意識たるや凡ての現實的意識內容を客觀に編入し、之を客觀として定立するものであるから、現實意識に對しては其判斷作用に於て實現せられんことを求めつゝ完全に實現せらるゝことなき理念に止まらなければならぬ。意識一般は眞理を求めんとする意志を有する所の個人意識に對して、其理想となる規範的

意識 Normalbewusstsein を表はす理念である。カントに於て認識成立の根本豫想として考へられた先驗的統覺としての意識一般は、批判主義を徹底するとき理念としての規範的意識とならなければならぬ。個人意識に對して判斷の超越的當爲として現れるものは本來客觀的意味として意識一般に對し存立するものである。意識一般は唯此當爲に從つて超越的意味が內在的に意識內容に於て實現せられ、之に由つて眞理の認識が成立する限り個人意識が部分的に實現する所の理念であつて、決して後者を離れて實在するものではない。リッケルトが力說する如く認識の對象が存在でなく價値である以上、認識の主觀としての意識一般は價値の主體であつて、其は唯價値の存立に豫想せられる形式的條件としての非實在的主觀に外ならない。之に何等かの實在性を賦與するとき、其は直ちに客觀に墮して主觀たることを失ふ。氏が其主著『認識の對象』の第三版に於て das fraglose Ja なるものを說き、問に答へ疑を解くにあらずして、絕對的に有意味內容を肯定する判斷を以て眞の意識一般に屬するものとしたのは、之をして凡ての現實的判斷作用に附隨する存在的內容を脫せしめんと欲した爲めである (Rickert, Der Gegenstand der Erkenntnis[III], S. 346—347)。而して氏は明白に其疑問を離れて肯定をなす意識一般が『現實の認識主觀に對する標準』『主

觀作用の規範』にして、理論的疑問を懷き眞理を求むる個人意識に對し『超時間的超疑問的に眞理を有する主觀の理想』を表はし、個人我は超越的當爲を承認して疑問を罷むる限り之に參與するものなることを說いて居る (S. 349)。

此節に述べたカントの意識一般の解釋に關しては、本年五月哲學雜誌第三八七號に掲載した余の論文『意識一般に就いて』を參照せられたい。

二

前節に述べたリッケルトの意識一般に就いての考はカントの批判主義を徹底する其立場から當然歸着すべきものであるけれども、併し氏の此概念に對する規定は尙其立場と相容れないものを含み、未だ其立脚地を純粹に徹底して居ないと思はれる點があるやうである。氏は一方に於て余が前節の終に引證した如く、意識一般を個人の現實的意識に對して規範となり理想となる非現實的の限界概念であると主張しつゝも、他方に於ては之を以て『超越的當爲を承認する意識』となし (Rickert, Op. cit. S. 346)、唯其承認或は肯定を以て疑問に答ふる現實的意識の要素を全然脫却せるものと考へた。併しながら若し全然現實意識の要素を脫却せるものならば、意識一般が

超越的當爲を肯定するといふことが果して言はれるであらうか。超越といひ當爲といひ又其承認肯定といふ如きことは現實意識に對してのみ意味あるものであつて、全く非現實的なる意識一般が超越的なる當爲を承認するといふ如きことは意味が無いことではないかと思はれる。非現實的なる意識がそれを超越する當爲を承認するとは抑も如何なることであらうか。若し唯現實意識に對する理想、規範としてのみ意識一般を考へるといふならば、其は現實意識が其超越的當爲の承認肯定に由つて認識の眞理價値を獲得する限り部分的に實現しつゝ、而も之を完全に實現し盡すことなきものなるが故に、凡ての意味價値の主體として唯形式的に思惟せられた理念に止まらなければなるまい。超越的なる當爲を承認肯定するのは現實意識の事であつて、意識一般が其超越的當爲を肯定するといふことは意味が無いやうに思はれる。從つて認識の價値は現實意識に由つて實現せられるけれども其は本來主觀の承認肯定と獨立に妥當するものであつて、意識一般の承認肯定に由り始めて存立するに至るものでなく、意識一般は唯其存立に對應する形式的Korrelatとして思惟せられるに過ぎないであらう。元來超越的意味もリッケルトが說いた如く價値形象として妥當するものたる以上、其價値がそれに對して妥當すべき主觀を豫想する。

此は個々の意味につきては其意味を承認して之に相應する眞理を認識する所の現實意識に於て實現せられるけれども、意味の全體、理論的價値の全體に對しては我々は其が妥當すべき主觀を現實意識に於て求めることが出來ぬ。唯現實意識が當爲に從つて判斷する限り漸次部分的に實現しつゝ、而も遂に完全に實現し盡すことなき理念としての意識一般を以て之に相當するものと考へなければならぬ。其が現實意識に對して實現の目標となる理想的規範意識となるのは之に由る。其故此は判斷作用に由つて始めて成立するに至るものでなく、唯客觀的意味、理論的價値の全體的存立に對し、其が妥當する主觀として同じく理念的に思惟せられたものに過ぎないのである。然るに右述べた如くリッケルトが意識一般を以て超越的當爲の承認肯定をなすものと解するのは、元來氏が判斷意識の分析から進んで認識の對象を超越的實在ならぬ超越的當爲とする考に達し、而して本來主觀は認識に於て客觀と離すべからざる概念であるが、今認識の主觀としての意識一般も客觀界定立の判斷主觀として當爲を承認肯定するものでなければならぬと思惟した爲めであらう。實際主觀は客觀と離すべからざる概念であり、而して先驗的觀念論の立脚地から客觀の依つて立つ根據となるものを意味、價値とするとき、此等が其に對し妥當すべき主

觀を豫想しなければならぬことは疑を容れざる所であるが、併し今も述べたやうに超越的なる當爲といひ、其承認肯定といふ如きものは現實の意識に就いてのみ意味があるのであるから、主觀としての意識一般が超越的なる當爲を承認肯定するといふことは出來ないのであつて、其は唯現實意識の判斷作用に對し規範、理想となるものとして、價値の全體的存立に對應して純理念的に思惟せられるものに止まらなければならぬ。之を主觀として其に對應する認識の對象はリッケルトの所謂超越的當爲でなく、超越的價値でなければなるまい。此事は已に氏自身の思想にも或程度まで含まれて居ると云つてよいと思ふ。氏は一九〇九年の論文『認識論の二途』に於て、氏が其主著『認識の對象』に採つたやうな先驗的心理學の方法は判斷意識の分析に由つて認識の對象に到達せんとするのであるが、判斷に伴ふ明證の感情は我々を內在的思惟過程から超越的對象界に導入れるものであると見て、判斷の對象として其承認と獨立に妥當する當爲を立するけれども、實は明證の感情は何處までも一つの意識內容に止まるから、其が指示するといふ超越的對象は之に由つて立證せられるものでなく、初めから假定せられて居るものでなければならぬ。是れ一つのpetitio principiに外ならない。其故此は認識論の方法として完全なるものでなく、眞に如何

なる認識作用をも超越する認識の對象を求めるには、認識作用と獨立なる文章の意味から出發する先驗論理學の方法に由るを優れりとすると說いた。唯若し後者卽ち客觀的の途のみに由るときは、認識の對象は完全に解明することが出來るとしても、對象の認識は之に由つて明にせられることが出來ない。然るに認識論は此第二の方面をも閑却することを許さゞるものであり、而して此は先驗心理學の主觀的道途に由つてのみ解明せられるものであるといふ理由により、氏は右の論文の後に出た『認識の對象』第三版(1915)に於ても、依然舊版と同じく大體に於て先驗心理學的方法を採りつゝ他方先驗論理學の客觀的方法を加味して、前者の如く認識作用の分析より出發せず、初めより作用と獨立に眞理の主張を含む判斷(文章)の意味より出發して認識の對象を求め、超越的意味が其否定の二重性より考へて價値形象Wertgebildeに屬するものならざるべからざることを明にし(Op. cit., S. 265—272)、而して其價値の形式が卽ち認識の對象性を成すことを示し、認識の對象としては終極に於て主觀的方法に依る場合と同じく、否或は後者が超越的當爲に止まるより尙一步進んで、超越的價値を採らざるべからざることを結論したのである(S. 277)。唯此場合に於ては全く判斷作用の意識と獨立に對象としての超越的價値に達するが故に、超越的價値の主

觀に接する一面ともいふべき當爲なるものが現れない(S. 277, 279)。客觀的方法に從つて認識の對象として認むべきものは主觀的方法の場合の如く超越的當爲でなく超越的價値(理論的)である。當爲は尙主觀に對する命令、要求といふ如き意味を脫することが出來ぬから純粹價値と同一視するを得ざるものであつて、眞に超越的に絕對に妥當するといふことは出來ぬ。從て客觀的方法が之を離れて絕對に妥當する超越的價値を認識の對象として發見せしめるのは主觀的方法に對する長所であるといはなければならぬといふ(S. 279)。果して然らば前述の認識の主觀としての意識一般も之を全く當爲の承認といふ如き作用の現實的內容から離脫せしめ、純粹に形式的の理念とし、唯現實意識の規範、理想となる、超越的價値全體の對應者といふ意味に解することは自然ではあるまいか。余はリッケルト自ら優れりとする新しき立場よりすれば、意識一般が右の如きものとなることは自然の歸結であると思ふ。而して若し意識一般が氏自身の認むる如く認識の主觀として現實意識の規範となり理想となるものであるとするならば、其は凡ての超越的價値の全體に對應するものでなければならぬから、其が現實意識の唯部分的に實現するに止まる理念であつて、之に對し其實現の爲めに現實意識に豫想せらるゝ當爲の承認なるものを擬するの

が不當なることは明であらう。氏が先驗心理學の主觀的方法に由つてのみ、認識の對象ならぬ對象の認識を說くことが出來ると考へて、判斷意識の分析から當爲の承認を說いたのは正當であるけれども、此は現實意識の理想たる意識一般にまで推擴することを許さゞる規定であると思ふ。余は右の如き譯でリッケルトの意識一般に關する思想も尙意識事實の混淆に由つて不純にせられて居る所がありはしまいかと考へるのである。

リッケルトは『形成せられたる內容が存在すとして承認せらるゝことなしにetwas für sich bestehendes として存在する』(S. 288)と考へることを批判主義の精神に反するものであると認め、認識の客觀が主觀を豫想して始めて成立する論理的構成の所產たる以上、之から全然判斷主觀の承認肯定を抽離するのは『獨斷的』實體論に墮するものであると主張する(S. 289)。氏がラスクの內容と形式との本來合一を說くに反對して、兩者の結合が判斷に由つて始めて成立するものなることを主張するのも之に由るのである(S. 282; 286—291) ラスクは判斷の價値對立を二樣に區別し、第一を眞、非眞Wahrheit (Wahrheitsgemässheis) u. Wahrheitswidrigkeit 第二を正僞 Richtigkeit u. Falschheit とした。正とは眞なる意味構造 Sinnstruktur を肯定し、非眞なる意味構造を否定する斷定

Urteilsentscheidung の價値、僞は反對に眞なる意味構造を否定し、非眞なる意味構造を肯定する斷定の價値である。卽ち此對立は斷定の當否に依る價値に外ならない。然るに斯く正僞が斷定の當否に依る價値の對立たる以上、其は必然其豫想として此斷定と獨立に判斷の意味構造自身が眞、非眞の價値的對立を有することを要求する。此が卽ち前揭の第一の對立である。此對立は肯定、否定の斷定に先だち其豫想たり標準たるものとして、判斷の意味構造、卽ち其要素間の結合關係其物に固有なるものでなければならぬ。卽ちそれは範疇と範疇材料 Kategoriennmaterial との適應と否とに基く價値の對立に外ならない。併しながら此樣に範疇と範疇材料との適否に依つて眞、非眞の對立を生ずるといふことは、更に此價値の對立に對し標準となる範疇と範疇材料との原始的相屬が、對立を絕して絕對的に妥當する價値として存立 bestehen することを豫想しなければならぬ。此が所謂超判斷的對象 urteilsjenseitige Gegenstände (Lask, Die Lehre vom Urteil. S. 53) であつて、卽ち認識の對象たるものである。其特色は範疇と範疇材料といふ如き要素が抽象せられ分離せられて可動的なる關係に結び付けられ、其結果適應、不適應といふ如き價値の差別を生ずる餘地を全く有せざる ein schlichtes durch keinerlei Antastung hindurchgegangenes Stehen der Inhalte in ihren Relationen (S.

96—97) たること、卽ち das schlichte Stehen des Kategorienmaterials in den Kategorien (S. 98) たることに存する。此判斷の彼岸にある融一的なる原始的對象領域 gegenständliche Urregion に對し、其要素を分別して範疇材料に範疇を結合するとき、主部に述部を prädizieren するものとしての判斷が生じ、茲に其兩要素の適否に從ひ前述の第一の價値對立たる眞、非眞の別が現れるのである。此は已に原始對象領域に對し要素分別といふ人爲技巧を加へた結果であつて、それだけ原始領域から離れたものである。判斷は斯かる距離 Abstand を隔てゝ原始的對象を映像するに止まる。從つて判斷の直接對象たるものは原始的對象領域に屬するものでなく、後者に於て未分に融合する一如の原始的統一を人爲的に要素に分ち、斯かる技巧に依つて之を主觀的に捕獲支配せんとする隨意の產物としての映像に過ぎない。判斷の意味 Urteilssinn 卽ちこれである。其構造は原始領域に屬せざる技巧の所產たるに止まる。之に對し更に判斷の第二の成素たる斷定 Entscheidung は單なる意味構造に於て未だ顯現的に分離せられざる、構造の組み立て關係、所謂 Sinnfragment S. 177) と、それの Wertqualität とを分ちて、其結合關係を肯定、否認するものであるから、其結果更に第二段の人爲技巧を經て判斷は原始對象に對し二重の距離を有するものとなる。判斷作用は實に此樣な二重

の技巧を通じて對象を映像するものであるから、其は決して對象の構成に與るものでなく、唯主觀が對象界をsich bemächtigenする手段となるに過ぎない。判斷領域 Urteilsregion は原始的對象領域と技巧的構造の重疊に由り隔離せられた主觀性 Subjektivität の所產に止まる。此が爲あに判斷、從つて概念、推論を取扱ふ形式論理は非對象的主觀的領域以上に出ることが出來ない。之に對し原始領域の對象構成に與るのは範疇であるから、範疇の對象構成を明にする先驗論理こそ主觀性に侵されざる客觀的の實質論理 materiale Logik であるといはなければならぬ。一般の das Logische は分れて das Formallogische と das Materiallogische となり (S. 111)、兩者は踰ゆべからざる溝渠に由つて隔離せられた二つの相異る領域に關係する。ラスクは此樣な立場からカントの所謂意識一般は Repräsentation des gegensatzlosen Stehens der Inhaltlichkeit in der transzendentalen Form と認むべきものであつて (S. 149)、之を判斷作用に關係せしむべきものでないと考へ、リッケルトの說の基調をなす Primat der Urteilslehre (S. 153) に反對して Primat des Konstitutiv-Logischen (S. 6) を主張するのである。之に對しリッケルトは其說が認識論上の實在論乃至プラトーンの價値形而上學に接近するものであつて、所詮認識主觀の概念は批判哲學から全然消去することを許さざるものなることを高

調した(Rickert, Op.cit., p. 288)。併しながら氏の論は曩に述べた所に由つて明なる如く、我々の現實的認識に對してのみ妥當する所を非現實的なる意識一般にまで推擴するの不當を犯すことは疑を容れない。實際現實の認識を論ずるに際しては氏の主張する如く(Rickert, Op. cit., p. 292)單に認識の對象を說くことが出來る先驗論理學の立場のみでは不充分であつて、現實意識の分析から進む先驗心理學の正常なる領域を認めなければならぬことは疑無いけれども、所謂『先驗心理學の權利』は此學の方法上必然に現實意識の範圍に制限せられなければならぬ。之を非現實的の理念たる意識一般にまで擴張することは許されない。宛も數學に於て有限の段階に成立する關係を無限の段階に於て始めて達せらるゝ極限に擴張することが一般に可能ならざる如く、現實意識の認識に於て必要なる超越的當爲の承認といふことを限界概念としての意識一般にまで推擴することは、其限界概念の本性上許されざる所であらう。氏は意識一般の當爲肯定が現實個人意識の場合に於ける疑問に答へるといふ性質を全然脫却することを說くけれども、それが果して如何なる方法に依り可能なるかは充分明にして居らぬやうである。是れ實はそれが本來不可能の要求なる爲めではないかと思ふ。當爲の肯定といへば其は必然疑問に誘起されて、否定

と對立的に現れる心理的事實たることを免れることが出來ない。疑問を離れた所謂das fraglose Jaなるものは實は肯定に由つて成立するものでなく、個人意識の肯定に豫想せられる價値の絶對妥當に外ならぬと思ふ。此は判斷に由つて始めて妥當するに至るのでなく、判斷に先だち其豫想として妥當するものでなければならぬ。ラスクが此點に着目して判斷の彼岸にある對象の領域を說き之を非對立的價値の絶對的存立と解したのは炯眼であるといはなければならぬ。意識一般は之に對應する主觀である。併し其は當爲に從つて現實に判斷作用をなす主觀ではないから、それが爲めにラスクの恐れる原始對象を主觀性に上つて侵すといふ憂は全然無い。唯何處までも價値といひ妥當といふ概念の Korrelat として必然豫想せられなければならぬ形式的の理念として思惟せられるに生まる。而もリッケルトの避けやうとするプラトンの價値形而上學は此理念的の主觀としての意識一般を認めることに由つて充分に免れることが出來るであらう。唯其は氏の考へる如く當爲の承認に依つて價値を妥當するに到らしめるものでなく、本來絶對的に妥當する價値の存立に對し唯形式的條件として思惟せられたる非現實的の理念であつて、現實判斷意識の當爲の承認に由つて唯部分的に實現せられつゝ、完全に實現し盡さるゝことな

き其理想を表はすものでなければならぬ。即ち此主觀は現實の判斷に規範を與へ、其に由つて實現せられんことを求むる極限であつて、自ら判斷するものではない。個人意識に對し超越的價値が超越的當爲を通じて現れるといふことは、限界概念たる意識一般の本性上不可能なことである。意識一般としての主觀は超越的對象の全體に對應する理念として其自身は非現實であり、唯現實意識の當爲承認に由り部分的にのみ實現せられるものであると考へなければならぬ。之に由つてのみ超越的價値を終局の認識對象と認めつゝ、而も矛盾無しにリッケルトの要求する如く主觀を說くことが出來るのである。氏が何處までも意識一般としての主觀を以て超越的當爲を承認肯定するものであると考へるのは、意識一般を以て非現實的の限界概念、現實意識に對する理想とする其立脚地に矛盾するものではないかと思ふ。意識一般としての主觀は超越的當爲に對應するものでなく、氏が之よりも一層根本的なる認識の對象であると認める所の超越的價値、ラスクの所謂對象的原始領域に對應するものであらう。而も斯く超越的價値に意識一般としての主觀が對應するといふことは、今迄述べた意識一般の限界概念又は理念たる本性上、決して超越的價値の絕對妥當を累するも

のでなく、却てリッケルトが其維持に苦心する認識主觀の概念を終局まで維持して、價値も價値主觀に對してのみ意味があるといふ立脚地を貫徹せしむるものではないか。然るに氏は認識主觀としての意識一般を以て飽迄超越的當爲の肯定者と考へた爲めに此點に就いて少からぬ困難に陷り、加之肯定に對する否定に對應して超越的禁止、或は消極的當爲、從つて超越的なる消極的對象(消極的價値)をも認めなければならぬやうになり、而もそれが實らしからぬ所から此點に就いての論斷を避けるに苦心して居ることは、注意して其書を讀むとき我々の推測せざるを得ざる所なる如く思はれる(Vgl. S. 314—315; 347)。此は全く氏が當爲肯定といふ條件を意識一般にまで推擴しやうとした結果であらう。此點に就いては氏が反對したラスクの超對立的超判斷的價値の絶對存立說の方が遙に徹底的であることは否定出來ない。余はラスク、溯つては氏が其思想を繼承したと思はれるヴィンデルバント(Windelband, Vom System der Kategorien; Über Gleichheit und Identität)の如く形式論理と先驗論理とを峻別し、後者のみ對象の構成に與るものであつて、前者は之に由つて成立せる客觀的對象界を主觀が捕獲支配する技巧的手段に過ぎずとする見解には同意し難きものであつて、ラスクの立場からは正當には範疇と稱すべからざる形式論理の最根本的

形式たる『自同』ヴィンデルバントが構成的範疇ならぬ反省的範疇の基本的なるものとする數理の形式『相等』の如きも、矢張夫々論理の世界に於ける對象、數理の世界に於ける對象を構成する範疇であり、而して特に客觀的對象界と考へられる『經驗』の世界、或は進んで自然の世界、文化の世界も此等を豫想して更に其上に順次獨特なる契機を加へることにより具體的規定に進む結果構成せられるものであつて、其構成に與る所のラスクの意味に於ける範疇の原始的內容包含も、之れが價値形象として妥當するものたる以上、リッケルトの考へる如く何等かの意味に於ける主觀の對應を脫する能はざるもの、而して凡ての絕對價値の存立には一般に前述の如き意識一般が對應すると考へることに依り、ラスクなどより一層充實した意味に於て論理の統一を試みることが可能ではないかと思念するものではあるが、とにかく氏がリッケルトに反して原始的價値の超對立的存立を說いたのは氏の徹底せる思索力を示すものであると信ずる。勿論氏は對立的價値の判斷領域に於ては何等遲疑する所なく Richtigkeit an sich に對し Falschheit an sich を認めたのであるけれども (S. 192) 此は氏の所謂擬超越 quasitranszendent の價値であつて、眞に純粹に超越的なる原始的の價値ではない。後者はリッケルトの考に反し全く對立を絕して其自身に絕對的存立を有す

るものと考へられなければならぬといふのが氏の思想である。此事は余が後に論じやうとする價値の本性、反價値の意義如何の問題に關係するものであつて、余は此點に關し充分明徹なる見解を得ることが價値的世界觀の樹立に對し甚だ重要なることを信ずるものである。リッケルトの如く意識一般としての主觀を以て超越的當爲を肯定するものとし、而して若し超越的價値と超越的當爲とは客觀的方法と主觀的方法とに依り發見せられた認識の對象として必ず相對應するものであるとしたならば、我々は肯定の當爲に對し禁止としての消極的當爲が對立する如く、氏の所謂消極的對象即ち超越的虛僞を以て超越的眞理(價値としての)に對立するものと認めなければならなくなるであらう。併しながら此歸結は右の前提を否定するときは必ずしも成立しないのであつて、我々はラスクの如く對立を絶する價値自體を立しつゝ、而も尙其主觀に對する關係を考へて判斷の肯定否定の對立を理解すべき根據を發見し得ると思ふ。斯くて反價値が價値に對して第二次的の意味を有するに止まり、必ずしも兩者の原始的對立を主張する必要の無いことが推定せられる。リッケルト自身も一方に於ては此見解に傾く如くに見えるけれども (Vgl. Rickert, Op. cit. S. 341, 344)、併し他方氏は價値の成立に對する主觀の關係を重視し、而して主觀を飽

迄も肯定、否定の對立作用を成すものと解するが爲めに、明白に此見解を主張することが困難になつたと思はれる。此問題に就いては尙後に改めて論ずる機會があると思ふのであるが、今認識主觀としての意識一般が形式的理念であるといふ思想を純粹に徹底すると共に右の如き見解の可能となる所以を注意するのは、必ずしも無意味なことではあるまいと思ふ。（未完）